

Title	自己教育性の側面についての検討-学習態度と生き方の問題との関連から-
Author(s)	尾崎, 仁美; 山本, 恵子
Citation	大阪大学教育学年報. 1997, 2, p. 173-184
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7932
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

自己教育性の側面についての検討 —学習態度と生き方の問題との関連から—

尾崎 仁美 山本 恵子

【要旨】

近年、「自己教育力」の育成は学校教育において大きな課題となっている。しかし、概念そのものが多義的である上、その評価が極めて困難であるため「自己教育力」に関する実証研究は数少ない。本研究では、「Ⅰ.成長・発展への志向」「Ⅱ.自己の対象化と統制」「Ⅲ.自信・プライド・安定感」という3側面を自己教育力育成のための心理的基盤として捉え、学習態度と生き方に関わる問題との2点から検討することを目的とした。その結果、(1)学習態度に関しては、上記の3側面すべてにおいて高得点を示すものに「予習・復習をする」「計画性をもって勉強する」という生徒が多いこと、(2)生き方との関連においては、「Ⅰ.成長・発展への志向」に高得点を示すものは将来をポジティブに捉えており、「Ⅰ.成長・発展への志向」と「Ⅲ.自信・プライド・安定感」の両方に高得点を示すものは生きがい感が高いことが分かった。つまり、学習態度には3側面全体が、生き方の問題に関しては、「Ⅰ.成長・発展への志向」と「Ⅲ.自信・プライド・安定感」が重要であることが分かる。以上より、「自己教育力」育成に向けて、学校教育においては、生徒各自の心理的基盤にも目を向ける必要があると言えよう。

問題と目的

1. 「自己教育力」要請の背景と現代的意義

「自己教育力」という言葉は、昭和58年11月の中央教育審議会教育内容等小委員会での審議経過報告において打ち出されたものであるが、今や、その育成がわが国の学校教育における重要な課題であることは大方の認識となっている。

「自己教育力」という概念は、その言葉こそ新しいものの、基礎にある考え方は古くから存在し、広く承認されてきたものだと言って良い。教育思想史上、ソクラテスの「産婆術」やペスタロッチの「自助への援助」などをはじめ、近代においては、デューイ (1955) も著書『民主主義と教育』の中で、「教育の目的は各個人をして自己の教育を継続させることである」と述べている。また、中教審が「自己教育力」という語を打ち出す10年以上も前に、社会教育審議会の答申(「急激な社会構造の変化に対する社会教育のあり方について」昭和46年)の中で、社会教育の基礎は「自発的な学習意欲」にあると繰り返し主張されていたことや、1972年の第17回ユネスコ総会で教育開発国際委員会の提出した報告書「未来の学習」(フォール報告書)の中で、各国における教育の改善・改革を貫くべき柱として「自己学習 (self-learning)」が大きく取り上げられていることから、教育の本質が学習者の自発性にあることは古くから繰り返し主張されてきた点であると言えよう。

しかし、今になってあえて「自己教育力」という新しい言葉で強調されるのは何故か。また、どうして「自己学習力」ではなく、「自己教育力」なのだろうか。

まず、「自己教育力」が取り上げられた背景に注目してみると、具体的には、教師一方的指導型の授業、受験教育の加熱による知識詰め込み教育といった従来の教育への反省、また、現代青

少年にみられる学習意欲の喪失・問題行動の増加といった現状、さらに、情報化、国際化、価値観の多様化、核家族化、高齢化など、学校をとりまく社会状況の変化等があげられている。つまり、今日の学校教育における教える側と学ぶ側双方の問題点を踏まえつつ、両者をとりまく今後の社会を展望した上で、変動の多い21世紀の社会に「主体的に対応する能力」という意味で、「自己教育力」が改めて要請されるようになったのだと言えよう。

また、中教審の審議経過報告における「自己教育力」の内容を見てみると、そこでは、「自己教育力とは、主体的に学ぶ意志、態度、能力などをいう」と定義されており、具体的な意味内容として、(1)「自己教育力とは、まずもって、学習への意欲である」、(2)「自己教育力は、学習の仕方の習得である」、

(3)「自己教育力は、これからの変化の激しい社会における生き方の問題に関わるものである」という3点が挙げられている(有園, 1987)。「自己教育力」が打ち出されるに至った背景と合わせて考えてみると、「自己教育力」が「自己学習力」と大きく異なるのは3つめの視点、つまり、「生き方」の問題と関連させて論じられている点であろう。

広岡(1985)によれば、「自己学習力」という際に、学習の対象となるのは知識や情報などの客体であるが、これに対し「自己教育力」という際にその教育の対象となるのは単なる客体的な知識ではなくて、自分自身であり、子ども主体であるという。つまり、「自己教育力」を育てるという際には、子どもが自分の生き方・自らの生活の仕方を自省しつつ改善していく、という意味が込められているのであり、「変化してゆく情報化社会にあって、たえず自己改造をしながら自らのよい生き方を創成していく能力」こそが「自己教育力」なのであると言う。新井(1985)もまた、「自己学習力」と「自己教育力」を比較する中で、「自己教育力」は「単に学習の手段や方法のみでなく、価値の創造・選択力をも含むもの」として捉える必要があると述べている。

以上をまとめると、「自己教育力」という概念は、単に自分で物事を学び、それを身につける力としての「自己学習力」を超えて、広く人間づくりを問題としている点で、人間の問題をより総合的に捉える概念であると言えよう。

2. 「自己教育力」をテーマとした実証的研究

以上に見てきたように、「自己教育力」は生き方の問題を含むものとして広く捉えられるがために今日の学校教育における重要な概念としてクローズアップされたのであるが、その反面、概念そのものの定義が非常に多義的で曖昧であるという問題点も生じることとなった。先にも述べたように、中教審の報告では、具体的内容として「学習意欲と意志の形成」「学習の仕方の習得」「生き方の探究」の3点を挙げているが、そういった力を現時点で持っているかどうかを評価することは極めて困難であり、北尾他(1989)の指摘するように、「社会へ出てからの自立した段階に達するまで自己教育力の有無を問うことはできない」とも言える。従って、「自己教育力」をテーマとした実証的な研究は数少なく、取り上げられた側面も研究者によって様々である。

例えば、北尾(1988)は、SET (Self Education Test) と呼ばれる自己教育力指導検査を作成しているが、そこではまず、領域として学習、性格、生活の3領域が挙げられ、それぞれの領域ごとに、学習領域では「課題意識」「主体的思考」「学習の仕方」「自己評価」の4特性が、性格領域では「集中力」「計画性」「自主性」の3特性が、生活領域では「生活体験の豊かさ」「自律生活」「自己実現」という3特性が挙げられている。この検査は、自己教育力を具体的なレベルで評価し、

何をどのように指導すれば良いのかを明らかにする目的で作成されたものであり、能力についての細かな測定よりも、指導に直接役立つことをねらいとしたものとされている。そのため、判定も「A.十分達成（十分身につけている）」「B.おおむね達成（おおむね身につけている）」「C.達成不十分（身につけていない）」といった形で行われる。

一方、梶田（1985）は、自己教育性を構成する主要な柱として「Ⅰ.成長・発展への志向」「Ⅱ.自己の対象化と統制（コントロール）」「Ⅲ.学習の技能と基盤」「Ⅳ.自信・プライド・安定感」という4つの柱をあげている。つまり、自己教育を行っていく上での基本的な志向性(I)と、その志向性に沿って自分自身を一步一步自ら前進させていく力(II)と、その前進の過程で道具的な意味を持つ学び方や基礎学習の力(III)と、そうしたすべてを一人の人格の中に落ち着かせ、安定した土台の上に乗っての前進を可能にする心理的基盤(IV)とである。

以下、梶田が取り上げた自己教育性の各側面について詳しく見てみると、自己教育ということにとって第一に重要な意義を持つ側面であるとされる「成長・発展への志向」は、現在あるがままの自分の姿から脱皮して、少しでも優れた存在へと自分自身を引き上げていく、といった志向性を持つことであると言う。具体的には、自己の成長・発展に関わる感覚とその認知面でのあらわれといった「目標の感覚・意識」、そして、それらを支える情意的な基盤としての「達成・向上の意欲」という2つの視点から捉えることが出来るとされている。また、「自己の対象化と統制」は、自分自身の現状と可能性、課題等を認識し、自分自身が選びとった方向へ自分自身が近づくよう自分自身に働きかける、という構えと能力であり、具体的には「自己の認識と評価の力」「自己統制の力」という2つの視点から考えてみることができるとされている。第三の「学習の技能と基盤」は、学校教育で直接的に形成される具体的な形での学力であり、これは「学び方の知識と技能」を身につけるという視点から、また、「基礎的な知識・理解・技能」をきちんと習得するという視点から考えてみることができるとされている。第四の「自信・プライド・安定感」は、上記の3側面を最も深いところにおいて支えるものであり、長い見通しをもって着実な努力を少しずつ少しずつ積み重ねていくことができるためには、静かで落ち着いた自分なりの自負と自信、そしてそれに支えられた心理的な安定性が不可欠であるとされている。

さらに、梶田は「学習の技能と基盤」を除いた3側面に関して「自己教育性調査票」を作成しているが、この3側面は「自己教育性」とされていることから分かるように、「自己教育力」そのものを直接的に扱ったものではなく、その育成の基盤となる個人の意識的な側面として取り上げられたものであると考えられる。

上記の調査票を用いた研究を見てみると、SETに関しては、自己教育力の学力検査成績の規定性と、生徒の自己診断と担任教師による評価の一致度が検討されており（北尾他、1989）、梶田による自己教育性調査票に関しては、学習態度及び学力との関係（浅田、1984）や、自己評価との関連（山本、1990）の検討、また、女子専門学校生の年度による比較（山本、1994a）や公立高校間の比較（山本、1994b）も行われているが、全体的に見て研究数はそれほど多くないと言えよう。

3.本研究の目的

以上に見てきたように、「自己教育力」の定義は曖昧で非常に多義的であり、また、「自己教育力」そのものをどれだけ持っているかを捉えることは極めて困難であるため、実証的な研究が少

ないばかりか、研究者によって取り上げられる側面も異なってくる。しかし、北尾ら(1989)の指摘するように、「自己教育力そのものでなくても、その育成の前提となる諸要因を明らかにし、評価する」ことは必要であると言えよう。従って、本研究では「自己教育性」を浅田(1984)に従い、「自らのねらいや目標を持ち、自らの現状をはっきり認識しながら、いかなる状況においてもその目標に向かって自らに働きかけ、自己を統制しながら自分なりの方法・技能を用いて、自己の改善を図っていかうとする構えと意欲」と定義し、梶田(1985)による自己教育性の3側面を「自己教育力」育成のための心理的基盤として取り上げた。

児島(1987)は、「自己教育力」の実践研究における問題を検討する中で、「学習の意欲や学び方の習得といった教科指導に深く関わる側面での実践研究が進んでいるのに対して、生き方の探求に関わるいわば社会的能力の育成に関係した内容の研究はどちらかと言えば遅れがちである」と指摘しているが、実際、実証研究においても「自己教育力」を生き方の問題と関連させて検討したものは見られない。

従って本研究では、梶田の取り上げた3側面が自己教育力育成にとってどういう意味を持つのかを検討するために、学習面での問題だけでなく生き方の問題をも取り上げ、それらとどのような関連を示すかについて検討することを目的とした。

方法

1. 調査対象者

調査対象者は、静岡県内の公立高校に在籍する2年生412名(男子194名、女子218名)である。

2. 調査時期及び実施方法

調査時期は1993年11月であり、質問紙による調査が、担任教師によってクラス単位で実施された。

3. 調査内容

(1) 自己教育性：自己教育性調査票(梶田、1985)の合計30項目について、「はい」「いいえ」の2件法で回答を求めた。

(2) 学習態度：「(a)私は、授業中先生の説明がよく分かるように、予習をして授業に出席します。」「(b)私は、習ったことが自分の身につくように、くり返し勉強します。」「(c)私は、自分なりに目標を立てて計画的に勉強しています。」の3項目について、「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」までの4段階で回答を求めた。

(3) 将来の自己像：20才の私は、40才の私は、60才の私は、に続けてそれぞれ自由記述で回答してもらった。

(4) PIL-生きがいテスト：PIL-Aの20項目について7段階で評定を求めた。

結果と考察

1. 自己教育性のタイプの分類

梶田の取り上げた自己教育性の3側面に関しては、それぞれが独自に存在するものではなく、互いに絡み合って個人の中に存在するものであると考えられる。従って、すべての側面を兼ね備えているものもあれば、ある側面だけが強く他の側面はそれほど強くないというものも存在するのが現実であろう。そこでここでは、自己教育性の各側面の組み合わせから合計8つのタイプに分類し、そこからどういったタイプが最も学習面や生き方において積極的な態度を持つのか、また、自己教育性の各側面がそれらとどのような関わりを持つのかを検討することにした。

まず、自己教育性調査項目30項目に関して「はい」に1点、「いいえ」に0点の得点化を行った。「Ⅰ.成長・発展への志向」「Ⅱ.自己の対象化と統制」「Ⅲ.自信・プライド・安定感」の各側面はそれぞれ10項目ずつからなっており、得点のレンジは0～10点である。各側面について、6点以上を高群、4点以下を低群とし、それらの組み合わせから（表1）に示した8つのタイプを作成した。理論的には8つのタイプが考えられるが、実際の人数を見てみると、多く見られるのは、「Ⅰ.成長・発展への志向」が高く「Ⅲ.自信・プライド・安定感」が低い3、4のタイプであり、「Ⅰ.成長・発展への志向」が低く、他の側面が高い5、6、7のタイプはほとんど見られないことが分かる。ここでは全被験者数の5%、すなわち20人を基準とし、それ以上の人数が見られたタイプのみを結果・考察の対象とした。

(表1) 自己教育性のタイプ

	Ⅰ.成長・ 発展への 志向	Ⅱ自己の 対象化と 統制	Ⅲ自信・ プライド ・安定感	人 数
TYPE1	高	高	高	41
TYPE2	高	低	高	27
TYPE3	高	高	低	71
TYPE4	高	低	低	67
TYPE5	低	高	高	3
TYPE6	低	低	高	10
TYPE7	低	高	低	6
TYPE8	低	低	低	25

(注) TYPE1～8に関して、特に序列性があるわけではない

2. 学習態度との関連

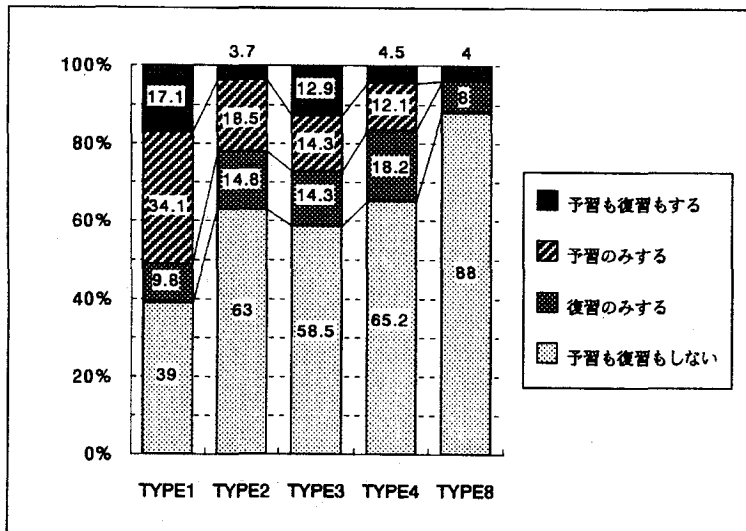
学習態度に関しては、出来るだけ具体的に捉えられるよう、「予習・復習をするかどうか」と

「計画性を持って勉強しているかどうか」の2点から捉えることとした。

(1) 予習・復習について

学習態度に関する(a)(b)の2項目について、「ややあてはまる」「非常にあてはまる」と回答したものを「予習をする」あるいは「復習をする」群として捉え、その組み合わせから「予習も復習もする」「予習のみする」「復習のみする」「予習も復習もしない」の4群を設定した。

(図1)より、TYPE1で最も「予習も復習もする」が多く、「予習も復習もしない」が少ない。



(図1) 自己教育性のタイプと予習・復習

また、TYPE5では「予習も復習もしない」が9割近くも占める。TYPE2、3、4を比較すると、「予習も復習もしない」では3つのタイプにそれほど違いが見られないものの、「予習も復習もする」に関しては、TYPE3でTYPE1と同程度の割合で存在することが分かる。

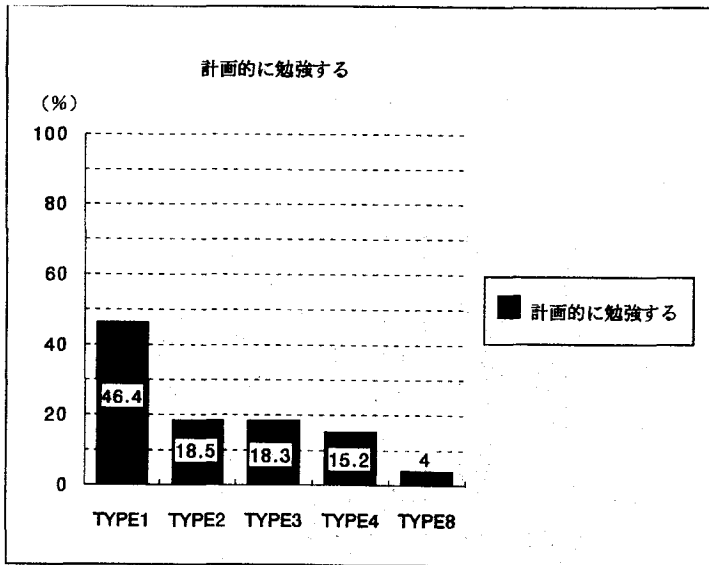
ここから、「予習・復習」をするかどうかに関しては「I.成長・発展への志向」と「II.自己の対象化と統制」の2側面が重要であることが推測されるが、それほど大きな違いは見られなかった。

(2) 計画性について

学習態度に関する(c)の項目について、「ややあてはまる」「非常にあてはまる」と回答したものを「計画的に勉強する」生徒として捉え、各タイプ別にその%を算出した。

(図2)より、「計画的に勉強する」に関しては、TYPE1で最も多く、TYPE5で最も少ないことが分かるが、それ以外のタイプに関しては、それほど大きな違いは見られなかった。

以上より、(1)の予習・復習についてもそれほど大きな違いが見られなかったため、学習面に関しては特にどの側面が強く関連するということは言えないが、すべての側面に高得点を示すTYPE1は、他のタイプと比較して「予習・復習をする」「計画性をもって勉強する」という生徒が多く、すべての側面が低得点であるTYPE5は、「予習も復習もしない」生徒が多く、また、「計画的に勉強する」生徒が少ないということが分かった。



(図2) 自己教育性のタイプと計画性

3. 生き方に関わる問題との関連

生き方に関わる問題としては、将来の自己像と現時点での生きがい感との2点を取り上げることにした。

(1) 将来の自己像との関連

各年代における記述について、藤原(1993)を参考に作成した以下の基準に基づき、ポジティブ・ネガティブ・ニュートラルのいずれかに分類した。

【ポジティブ】将来像が明確であり、未来に積極的に関与していく姿勢が感じられるもの、及び、将来像が明確でなくとも明るいイメージを持っていると考えられるもの

(例) 志望する大学の志望する学部に入り、学びたいことを学んでいる (男子、20才の私)

結婚して、安定した人生かつ意義のある人生を送っている (女子、40才の私)

【ネガティブ】将来に対して、否定的なイメージ、暗いイメージを持っていると考えられるもの

(例) あまり勉強しない大学生になっている (男子、20才の私)

死んでいる (女子、60才の私)

【ニュートラル】単に“大学生”“老人”といった類の記述、及び、ポジティブ・ネガティブのどちらの意味あいも含まないもの

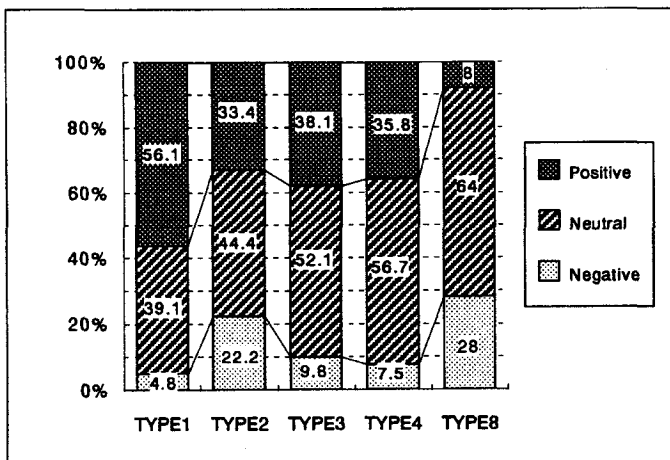
(例) 成人式を迎える (男子、20才の私)

主婦 (女子、40才の私)

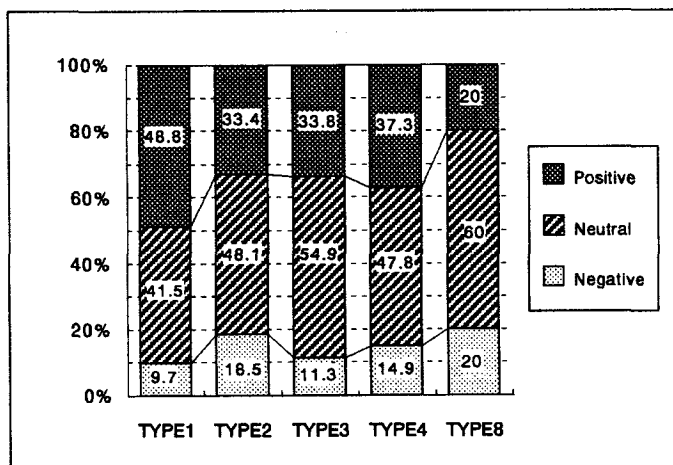
教育心理学専攻の3名で50人分の記述に関してポジティブ・ネガティブ・ニュートラルの評定を行ったところ、93.3%の一致率を得ることができた。

年代別、自己教育性のタイプ別にポジティブ・ネガティブ・ニュートラルの%を算出したもの

が(図3)(図4)(図5)である。40才の自己像で差が緩やかになるものの、20才と60才の自己像では、TYPE8にポジティブが少なく、ネガティブが多く見られることが言える。TYPE1~4にそれほど違いが見られないことから、将来のポジティブな自己像と最も関連するのは「I.成長・発展への志向」であり、他の2側面の得点が低くともこの側面が高ければ将来の自己像がポジティブになり得ることが分かる。



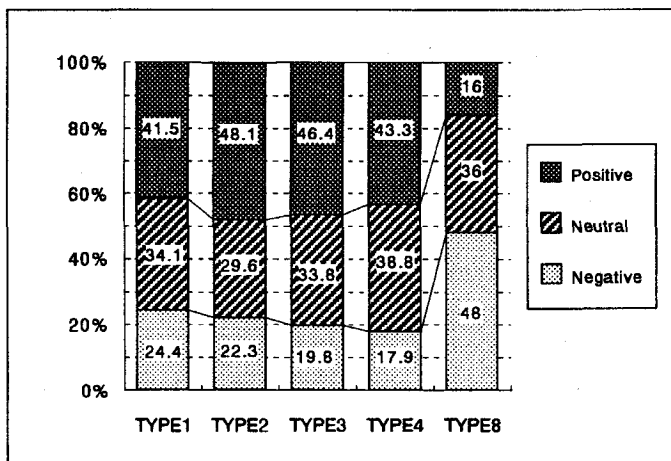
(図3) 自己教育性のタイプと20才の自己像



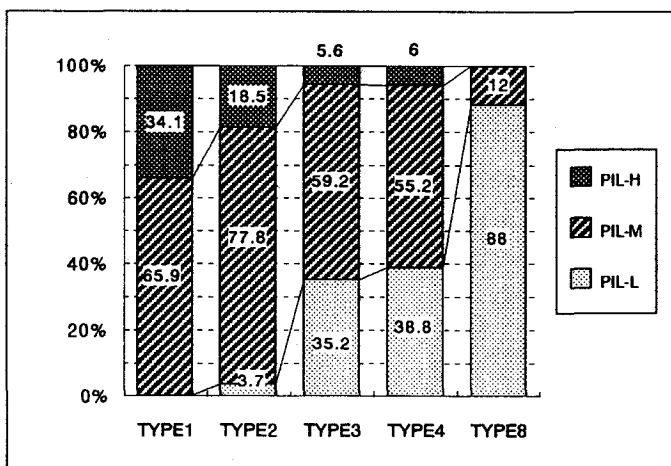
(図4) 自己教育性のタイプと40才の自己像

(2)生きがい度との関連

PIL-Aテスト20項目に関しては、マニュアル(岡堂、1993)に従い、各項目の点数を加算して総得点を算出した。従って、総得点は20点から140点の間に分布することになる。PIL-Aの判定基準によれば、15~24歳においては、20点~79点が低群、80~109点が中群、110~140点が高群とされているため、ここでもその基準に従い3群を抽出した。



(図5) 自己教育性のタイプと60才の自己像



(図6) 自己教育性のタイプとPIL得点

(図6) より自己教育性のタイプとPIL-A得点との関連を見ると、TYPE1、2では他のタイプよりもPIL高群・中群が多く、低群はほとんど見られないのに対し、TYPE8では低群が多く高群は全く見られない。またTYPE3とTYPE4にはほとんど違いは見られない。

以上より、生きがい感と大きく関連を持つのは、「Ⅰ.成長・発展への志向」「Ⅲ.自信・プライド・安定感」の2側面であり、TYPE1、2とTYPE3、4の比較から、たとえ「Ⅰ.成長・発展への志向」が高くとも「Ⅲ.自信・プライド・安定感」が低ければ、必ずしも得点が高くなるとは限らないことが分かる。

以上より、生き方の問題に関しては、将来をポジティブに捉えるためにまず必要なのは「Ⅰ.成長・発展への志向」であり、生きがいをもって人生を送る上では、それを支える形で「Ⅲ.自信・

プライド・安定感」が重要となってくると言えよう。3側面のうち「Ⅱ.自己の対象化と統制」は、生きがい感や将来像とは直接関連が見られなかった。

4.結果のまとめ

得られた結果をまとめると、学習態度においては、特にどの側面が強く関連するかは明らかにできなかったが、すべての側面に高得点を示すタイプが「予習・復習」と「計画性」の観点での学習態度が最も積極的であることが分かった。ここではできるだけ具体的に捉えられることに重点を置いたが、学習態度に関しては、どれだけ実行できているかだけでなく、そういった意欲をどれだけ持っているかという観点からの検討も必要だったのかもしれない。

また、生き方の問題に関しては、将来をポジティブに捉えるためには「Ⅰ.成長・発展への志向」が第一に重要であり、生きがいをもって人生を送る上では、それを支える形で「Ⅲ.自信・プライド・安定感」が必要となってくることが分かった。

これらの結果は、「Ⅰ.成長・発展への志向」が自己教育に関してまず第一に重要な意義を持つものであり、「Ⅲ.自信・プライド・安定感」は他の側面を最も深い部分で支えるものであるという梶田（1985）の説を支持するものと言えよう。

本研究より、「成長・発展への志向」「自己の対象化と統制」「自信・プライド・安定感」といった心理的な基盤も「自己教育力」育成においては重要な意味を持っていることが明らかにされた。学校教育場面で「自己教育力」を考えた場合、「学習への意欲」や「学習の仕方」といった授業で直接捉えやすい側面、あるいは学力と直接結びつきやすい側面に焦点が当てられやすいが、生き方の問題をも含むものとして「自己教育力」を捉えるならば、生徒各自が将来に向けて成長・発展への志向を持っているかどうか、また、生徒各自の中に自信や安定感を育てていくにはどうすればよいか、といった、生徒一人一人の内面にも目を向けていく必要があることがここから示唆されよう。

今後の課題

学校教育において、近年、「自己教育力」や「生きる力」の育成が大きな課題となっている。しかし、問題意識でも述べたように、こういった用語は概念規定が明確でなく、また、そういった「力」を現時点で持っているかどうか捉えることにも限界があるため、実証的に研究していくのは極めて困難である。本研究では自己教育性として取り上げられた3側面が、生き方の問題、学習面での態度とどのような関連するのかを検討したが、「自己教育力」育成にこの3側面が重要な意味を持つことは言えても、この3側面だけで自己教育性が網羅されているかどうかはここからは結論づけられない。今後は、「自己教育力」そのものの捉え方を基礎的な研究を積み重ねる中でさらに検討していく必要があると考えられる。

文献

- 新井郁男 1985 自己教育力育成と学校教育の課題 現代教育科学, 339号, 5-9.
 有園 格 1985 教育改革論議と自己教育力 北尾倫彦編 自己教育力を考える 図書文化社, 12-18.
 浅田 匡 1984 「自己教育性」の諸側面とその若干の規定因について 大阪大学人間科学部修士論文 (未発表)

- Dewey, J. 帆足理一郎訳 1955 民主主義と教育—教育哲学概論— 玉川大学出版
- Faure, E. 国立教育研究所内フォール報告書検討委員会訳 1975 未来の学習 第一法規出版
- 藤原由妃 1993 高校生の自己教育性に関する一考察—ある進学校における自己教育性のあり方について—大阪大学教育心理学年報, 2, 93-106.
- 広岡亮蔵 1985 変動する社会は自己教育力を求める 現代教育科学, 339号, 10-14.
- 梶田毅一 1985 自己教育への教育 明治図書
- 北尾倫彦 1988 〈新テスト紹介〉教研式SET自己教育力指導検査 指導と評価, 34(1), 31-34.
- 北尾倫彦・杉村智子・垣崎聡美・鈴木徹 1989 自己教育力の学力規定性とその評価に関する研究大阪教育大学紀要(第IV部門), 38(2), 165-174.
- 児島邦宏 1987 自己教育力の実践研究をめぐる課題 自己教育力読本(教職研修増刊, NO.34)教育開発研究所, 57-63.
- 岡堂哲雄監修、PIL研究会編 1993 生きがい 河出書房新社
- 新堀通也 1987 日本の教育風土と自己教育力 北尾倫彦編 自己教育力を考える 図書文化社, 30-37.社会教育審議会答申 1971 急激な社会構造の変化に対処する社会教育のあり方について
- 山本恵子 1990 Self-Esteemに関する研究—自己教育性との関係について— 日本教育心理学会第32回総会発表論文集, 215.
- 山本恵子 1994a 女子青年の自己教育性に関する一考察 聖徳保育論叢, 7, 63-77.
- 山本恵子 1994b 高校生の自己教育性に関する研究(Ⅰ)—ある2つの公立高校における自己教育性のあり方の比較— 日本教育心理学会第36回総会発表論文集, 198.

A Study of Aspects of Self-Educability

— Concerning attitude toward learning and the problem of how to live life —

Hitomi OZAKI Keiko YAMAMOTO

Recently, "self-educability" has become one of the most important issues in education. But there is little research and investigation about "self-educability" because the definition is ambiguous and the evaluation is too difficult. In this study, three aspects of "self-educability" were taken up as the psychological basis of self-educability. They are 'Orientation toward self-growth', 'Self-objectification and self-control', and 'Self-confidence and stability'. The purpose of this study was to examine these aspects of self-educability in relation to the attitude toward learning and the problem of how to live life.

The results are as follows: (1) concerning the attitude toward learning, those who had high scores in all three areas prepared and reviewed their lessons and made plans for studying; (2) concerning the problem of how to live life, those who had high scores in the area of 'Orientation toward self-growth' imaged a bright future for themselves while those who had high scores for both 'Orientation toward

self-growth' and 'Self-confidence and stability' lead a worthwhile life.

Therefore, all three aspects were necessary for a positive attitude toward learning. 'Orientation toward self-growth' and 'Self-confidence and stability' were necessary for a positive attitude toward life. The results show that it is important for teachers to pay attention to students' inner world in order to nurture "self-educability" in school.